杏林大学大学院国際協力研究科『大学院論文集』No. 8, 2011. 3

再考：社説におけるハズワナイ文とハズガナイ文の研究

——その構造と意味、文脈における機能、効果の相違に関する一考察——

大水　利之

要　旨

本研究の目的は社説（議論文）を対象としてハズワナイ文とハズガナイ文を前後の文脈の論理関係に視点を据えて考察し、両者の意味、文脈上の機能と効果について明らかにすることである。

第一部では両者の用例を新聞の社説より収集し、それぞれの意味の定義づけを試みた。その上で文脈上の機能について分析した結果、両者ともに反道義的・可能性大と想定したコトを完全否定する働きを持つが、ハズワナイ文が完全否定を客観的判断によって行っているのに対し、ハズガナイ文は主観的排除による完全否定であって、この点が異なると考えた。

また、前後の文脈の分析から、両者の論理接続機能には、①提言への接続、②提言の帰結（主にハズガナイ文）が確認された。これは社説における肯定形のハズダ文を考察した筆者の研究（2010a）と同様の結果である。

第二部では両者の効果の仮説を導き出した。ハズワナイは客観的判断によって、同質化をめざしてトピックセンテンス化する、ハズガナイは道義性・可能性の主観的排除によって訴え、同質化をめざして先行文脈を収束（提言の帰結）する、という仮説である。

仮説に基づき、両者が用いられる局面のモデル化（図示化）を行い、両者の効果と前後の文脈との論理関係について考察した検証の結果、否定形のハズワナイ文とハズガナイ文ともに同質化のモダリティを持つという結論に至った。

キーワード：同質化、客観的判断、主観的排除、提言への接続、トピックセンテンス化、先行文脈の収束（提言の帰結）

1．はじめに

ハズワナイは形式名詞ハズと係助詞の「ハ」、形容詞のナイで構成されている。一方、ハズガナイは形式名詞ハズと格助詞の「ガ」、形容詞のナイで構成されている。否定形のハズダの意味や機能、効果などについて明確に論じている先行研究は極めて少ない。本研究では社説（議論文）を研究対象とし、先行・後続文脈との論理関係に視点を据えて、両者の意味、文脈上の機能と効果の考察を試みた。

2．先行研究

否定形のハズダを対象とした研究は数少ない。ハズワナイとハズガナイの構造の違いは「ハ」と「ガ」のみである。ここでは「は」と「が」を主題による統一原理でまとめた野田（1996）、ハズガナイの意味機能の分類を試みた岡部（2004）の研究を紹介する。本研究では両者の研究を分析・考察の視点としている。以下に各要点を記す。

2.1　野田尚史（1996）『新日本文法選書１「は」と「が」』

野田（1996）は「は」と「が」の構文分析から使い分けの原理について、先行研究群の５原理（カッコ内）を「主題」という統一した視点から考察し、次のように５つの新原理を提唱した。①主題をもてるかどうかの原理（文と節の原理）、②主題をもつかどうかの原理（現象文と判断文の原理）、③何を主題にするかの原理（新情報と旧情報の原理）、④主題を明示するかどうかの原理（措定と指定の原理）、⑤どうとりたてるかの原理（対比と排他の原理）。本研究ではハズワナイ、ハズガナイの文脈的特徴から、主として新旧情報の原理や対比・排他の原理等を参考に両者の分析と考察を試みた。

2.2　岡部嘉幸（2004）「ハズガナイとハズデハナイについて」（ハズガナイの分類の記述部分を要約）

岡部（2004）はハズガナイの基本的意味を「理屈の上では当該の事態が決して成立しえないということを語る」と述べ、その意味用法を「現実における成立を問題にする」〈Ａタイプ〉と「現実における成立を問題にしない」〈Ｂタイプ〉に分けた。さらに〈Ａタイプ〉、〈Ｂタイプ〉を以下のように二分類した。

前者は「現実成立を未確認」の〈実現可能性の強い否定〉（断定）と「現実成立確認済み」の〈事態不成立のさとり（納得）〉と定義し、後者は「現実事態との対立関係あり」の〈事態不成立の正当性〉と「現実事態との対立関係なし」の〈理屈上の事態不成立〉と定義した。

岡部は論文の中でハズワナイとの相違については言及していない[1]。しかし、岡部の研究で注目すべき点は、肯定のハズダの核となる要素である「断定」や「さとり」、

[1] 岡部（2004）は論文の中でハズワナイとハズガナイの相違については特に区別せず、同質のものとして扱っている。その他の研究者による先行研究群においても、ハズワナイとハズガナイに相違なし、あるいは、換言可能といった記述にとどまるものがほとんどである。

論理の正当性が否定表現にも表れる分類である。これは本研究と同じ結論である。

3．研究目的と方法

本研究の目的は、社説（議論文）におけるハズワナイ文とハズガナイ文を先行・後続文脈の論理関係に視点を据えて考察し、両者の意味、文脈上の機能と効果について明らかにすることである。

研究の第一部ではハズワナイ文、ハズガナイ文の用例を（主として「朝日新聞」、「読売新聞」の社説より）収集し、まず、両者の意味の定義づけを試みた。

次に各用例群を分析して論理展開における文脈上の機能について分析した。結果、ハズワナイ文、ハズガナイ文ともに反道義的・可能性有と想定したコトを完全否定する働きを持つと分析した。そして、**ハズワナイ文**が完全否定を**客観的判断**によって行っているのに対し、**ハズガナイ文**は**主観的排除**による完全否定であることが異なると考えた。

また、前後の文脈との論理関係を分析した結果、論理接続の視点による機能として、①**提言への接続**（ハズワナイ文、ハズガナイ文共通）、②**提言の帰結**（主としてハズガナイ文）、を抽出した。この結果は社説における肯定形のハズダ文を考察した筆者の研究（2010a）と同様のものである[2]。

第二部ではハズワナイとハズガナイの機能と前後の文脈との論理関係に基づき、効果の仮説を導き出した。**ハズワナイ**は**客観的判断**によって論者の論理正当性を訴え、**同質化**をめざして**トピックセンテンス化**する、**ハズガナイ**は道義性・可能性の**主観的排除**によって論者の論理正当性を訴え、**同質化**をめざして**先行文脈を収束（提言の帰結）**する、という仮説である。

この仮説に基づき、両者が用いられる局面のモデル化（議論の中で両者がいかなる効果をもって用いられているか、その仕組みの図示化）を行った。そして、両者の効果と前後の文脈との論理関係について用例群を再度モデルに当てはめ、分析・考察を通して仮説の検証を試みた。

4．分析：構造と意味，文脈上の機能

4.1　ハズワナイの構造と意味

ハズワナイ文もハズガナイ文もその構造は［ハズにかかる文＋ハズ］を係助詞の「ハ」、または格助詞の「ガ」で受け、ナイによって全面否定している構造である。構造的な相違は「ハ」と「ガ」が異なるのみである。この相違がハズワナイとハズガナイの意味を決定づけるものと考える。

ハズワナイの構造は［先行文脈から論者が想定したハズに収束されるコト（否定の

[2] 大水（2010a：31-32）は社説（議論文）における肯定形のハズダ文を分析した結果、その機能として、①提言への接続、②提言の帰結、③批判、の３つの主機能を抽出した。

対象は、①反道義的、あるいは、②可能性大と仮定したコト[3]）＋ハズ＋ハ（客観的判断、主題化）＋ナイ（全面否定）］である。

ハズに収束されるコトは、先行文脈の特徴からもたらされる。ハズワナイ文の先行文脈の特徴は、事実を中心に構成された情報群によって構成されていることである。論者は先行文脈での事実に基づいた情報群を踏まえて、ハズワナイで否定すべきコトを述べるわけであるが、それが客観的判断の情報だと考えた。

この構造と「ハ」が有する主題化、対比、判断、旧情報等の原理から、**ハズワナイ**の意味を、ハズに収束された成立不可能なコトの完全否定による**客観的判断**[4]、とした。

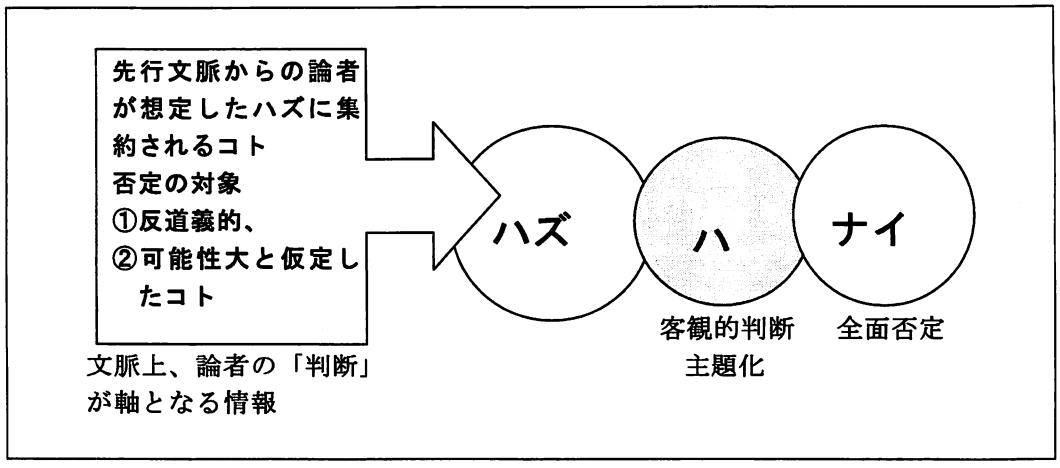


図1　ハズワナイの構造

4.2　ハズガナイの構造と意味

ハズガナイの構造は［先行文脈からの論者が想定したハズに収束されるコト（否定の対象は、①反道義的、あるいは、②可能性大と仮定したコト）＋ハズ＋ガ（主観的排除）＋ナイ（全面否定）］である。

ハズに収束されるコトは、先行文脈の特徴からもたらされる。ハズワナイが事実を中心とした情報構成なのに対し、ハズガナイは論者の見解、それも否定的な見解を中心に構成された情報群であることが特徴である。論者はあるトピックに対して、先行文脈で述べた自身の見解を踏まえ、ハズガナイ文で否定すべきコトを述べる。それが「排除」の見解が軸となる情報だと考えた。

この構造と「ガ」の有する性質（名詞と述語の論理関係の提示、非主題化、排除、

[3] ①反道義的と仮定したコトは、先行文脈の情報群から推測して、論者（あるいは読者）が道義的、論理的にあり得ないと仮定したことを指す。一方、②可能性大と仮定したコトは先行文脈から判断して、その可能性があり得ない最大限の仮定を指す。これらの仮定がハズに収束され、ナイによって全面否定される構造をなす。

[4] 客観的判断は、論者が事実を軸とした先行文脈の情報群から分析的に判断を下し、後続文脈への議論のトピックセンテンス（問題提起）化する思考の結果だと考えた。

新旧情報等の原理から、**ハズガナイ**の意味を、ハズに収束された成立不可能なコトの完全否定による道義性・可能性の**主観的排除**[5]、とした。

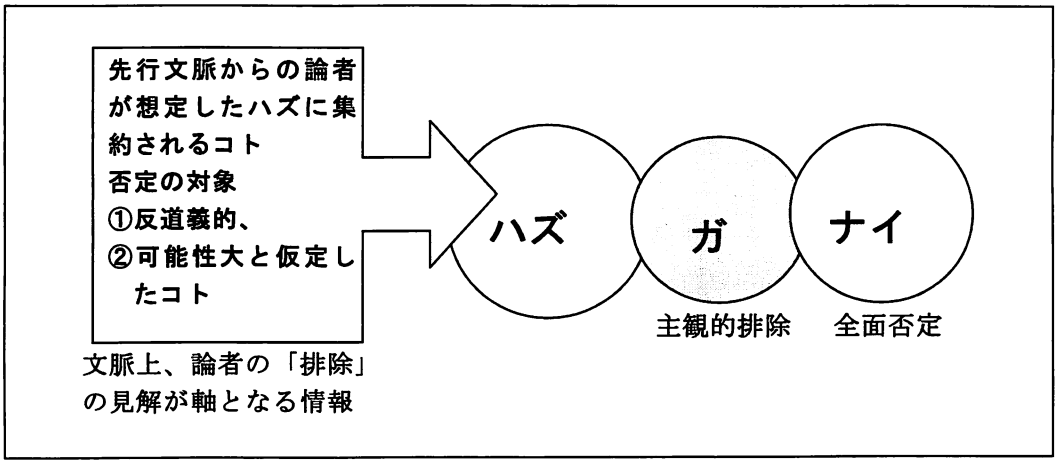


図２　ハズガナイの構造

4.3　ハズワナイの文脈上の機能

社説総数 286：ハズワナイ文総数 121 例中、判断は 73 例、そのうち一例抜粋

用例１　「ギリシャ支援　ユーロ安定へいばらの道」（要約文）朝日 10.5.04（波線は論者の意見相当部：筆者による）

Ⅰ①財政危機のギリシャへの支援策がまとまった。

Ⅱ②ギリシャの財政再建策実行を前提にＥＵ諸国とＩＭＦが３年間で 1100 億ユーロ（14 兆円）の協調融資を行う。

Ⅲ③ギリシャ国債を大量保有する欧州の銀行が傾けば、世界金融に影響拡大。④世界経済混乱の危機的状況だった。⑤ただ、この支援策で当面対応できても、欧州が抱える根本的脆弱さが克服されるわけではない。

Ⅳ⑥ギリシャの財政削減は成果を上げられるか。⑦ユーロ圏諸国の連帯崩壊はないのか。⑧疑念は市場に渦巻く。⑨ＥＵはギリシャの財政再建完了まで支援するほかない。

Ⅴ⑩この巨額支援に至るまで、欧州は苦悩、迷走した。

Ⅵ⑪ギリシャの財政深刻化は昨年末。⑫当初から支援要請側ドイツは冷淡だった。⑬市場は反応し、ギリシャ国債は暴落。⑭ユーロ全体の信用問題に発展。⑮ＥＵ首脳会議での支援表明でも収拾せず、ギリシャ国債は大幅格下げに。⑯ＩＭＦ関与に至り、欧州のみの解決不能が露呈。

Ⅶ⑰欧州中央銀行という一中央銀行のもと、ユーロの単一通貨を持つ。⑱それは、当

[5] 主観的排除は、論者が自身の見解を軸とした先行文脈の情報群からハズに収束されるあり得ないコトを導き出し、それを排除する思考の結果だと考えた。

初、加盟国の経済の実力差があっても、次第に収斂することを前提とした仕組みだ。

Ⅷ⑲強い産業基盤のない国には重い課題だ。⑳通貨を安くして輸出増や観光客増ができなくなるからだ。㉑先行国に並ぶには相当な改革が必要だった。㉒が、ギリシャは努力を怠り、統計粉飾までして巨額財政赤字を隠ぺい。

Ⅸ㉓放漫財政で破綻しそうな国が救われる。㉔救うのは別の政府の別の国民。㉕一国の中での都市の過疎救済とは違う。㉖**救う側の国民が、簡単に納得できるはずはない。**

Ⅹ㉗だが、ドルに対抗する通貨に育ちつつあったユーロの信頼を保持するためには、各国首脳らがギリシャ支援の必要性を各国民に説得する以外にないだろう。

Ⅺ㉘当面、ＥＵや各国の政治信頼が、この危機を方向づけるといっても過言ではない。㉙長期的安定も経済が一体化し、後戻り不可能な以上、政治統合の進展がカギに。

Ⅻ㉚ユーロが危機脱出し、信頼回復しなければ、日本を含む世界経済も再び大きく揺らぐ。㉛正念場である。

	段落と文の番号	論理構成の要素	内容の要旨
序	段落Ⅰ①	話題提示	財政危機のギリシャへの支援策がまとまった。
論	段落Ⅱ②	具体例提示	EU 諸国と IMF が 1100 億ユーロの協調融資を行う。
↓	段落Ⅲ③④⑤	問題点／見解	世界金融に影響大の危機。支援策でも不安。
	段落Ⅳ⑥⑦⑧⑨	疑念と見解	市場疑念は増す。EU は最後まで支援するしかない。
本	段落Ⅴ⑩	問題の経緯①	EU は今回の支援に至るまでに、苦悩、迷走した。
論	段落Ⅵ⑪⑫⑬⑭⑮	問題の経緯②	昨年末、ギリシャ財政深刻化、支援国独は冷淡。市
1	⑯	(具体事実)	場暴落、ギリシャ国債格下げ、EU での解決不能に。
↓	段落Ⅶ⑰⑱	ＥＵ経済の仕組み	一中央銀行が単一通貨を保有。これは加盟国の経済差が次第に収斂することを前提とした仕組み。
	段落Ⅷ⑲⑳㉑㉒	前述の仕組みの問題	強い産業基盤なきギリシャには負担大。先行国並みになるには相当な改革を要するが、努力を怠った。
↓			
本	段落Ⅸ㉓㉔㉕㉖	**トピックセンテンス化**	放漫財政で破綻しそうな国が、他国に救済される。
論			**救う側の国民が、簡単に納得できるはずはない。**
2	段落Ⅹ㉗	論者の提言	ユーロ信頼回復は各国首脳がギリシャ支援を国民に説得する以外にないだろう。
↓			
結	段落Ⅺ㉘㉙	提言の補足１	EU や各国の政治信頼が問題解決の鍵となるだろう。
論	段落Ⅻ㉚㉛	提言の補足２	ユーロの信頼回復なくして世界経済の安定なし。

表１　用例１の論理構成

用例１の社説は前半部で話題を絞り込み、後半部で論者の意見を展開する二部構成となっている。ハズワナイ文は二部構成の前後半の議論の分岐点に位置する。

用例１はハズワナイ文の前後で二分される。まず、先行文脈において話題の提示が

なされ、問題の背景や具体的事実を軸に議論が展開される。そして、ハズワナイ文で議論の核となる問題提起がなされ、それを受けた後続文脈において論者の提言に接続、議論が発展する。

形式名詞ハズに代入可能な名詞は「道理」、「理屈」等が考えられる。ハズワナイが否定するコト（ハズに集約される「㉖**救う側の国民が、簡単に納得できる**」の部分）は先行文脈から喚起され、論者が想定したコト（文脈から読者が推論可能なコト）である。論者はハズに収束されたコトを否定することによって客観的判断を下すと同時に、ハズワナイ文をトピックセンテンス（問題提起）として読者に提示する。

ハズワナイ文の客観性は事実を軸とした先行文脈の情報群の特徴と関連がある。先行文脈の客観性がハズワナイ文において係助詞「ハ」と結びつくのである。つまり、「ハ」の主題を表す機能（文中において、ハズに包括された部分の伝達を重視）と対比を表わす機能（㉗「だが、ドルに対抗する通貨に育ちつつあったユーロの信頼を保持するためには、各国首脳らがギリシャ支援の必要性を各国民に説得する以外にないだろう。」の文がハズワナイ文と対比関係）が先行文脈の論理の流れから、論者に「ハ」を無意識に選択させていると考える。

ここにハズワナイの文脈上の機能を次のように定める。

ハズワナイは反道義的・可能性有と想定したコトの完全否定（**客観的判断**）によって、論者の論理正当性を訴える働きを有する。

ハズに収束される「㉖**救う側の国民が、簡単に納得できる**」の部分に肯定形のハズダを用いた類似表現の「**救う側の国民は、簡単に納得できないはずだ**」を置き換えてみよう。肯定形のハズダに換言すると、前後の文脈の流れに沿わない違和感が生じる。これは議論における非難の矛先が異なることから、両者の相違がもたらされるためである。

肯定形の「**救う側の国民は、簡単に納得できないはずだ**」の非難の対象は怠慢な財政政策をとったギリシャ政府へと直接的に向けられる文意となる。この論理によると、議論の軸はドイツをはじめとする救済国の国民は、財政改革を怠ったギシリャ政府に対して納得できないのだから、ギリシャ政府は財政再建に努力すべきだという点に置かれ、後半の提言（ＥＵ各国の政治信頼が問題解決の要）への流れに論理的なずれが生じてしまう。

一方、ハズワナイ文（「㉖**救う側の国民が、簡単に納得できるはずはない**」）は、ギリシャの財政再建はＥＵ各国の支援なしに、もはや不可能な状況下にあるという現実に対する論者の理解の認識が前提となっている。故に後続文脈の建設的な提言へと論理的に接続するのである。

両者の非難の対象がずれるのは、係助詞「ハ」による主題化の対象が異なるためである。肯定形「**救う側の国民は、簡単に納得できないはずだ**」の主題は「救う側の国民」である。この部分を主題化することは、論者の非難の視点が「救う側の国民」と

一体化することにほかならず、後続文脈の論理展開は必然的にギリシャ政府への直接的非難とならなければならない。

対するハズワナイ文の主題はハズに収束される「**救う側の国民が、簡単に納得できるはず**」である。論者の非難の視点は、先行文脈の情報群から考えられる「道理」や「理屈」から判断して、救済国側の国民の納得はあり得ないということに軸が置かれている。故に後続文脈は現実を踏まえた客観的な提言へと論理展開するのである。

このように肯定形と否定形による主題化の対象の相違（係助詞「ハ」の主題化の対象）が、論理の流れを決定づける重要な要素たりえるのである。

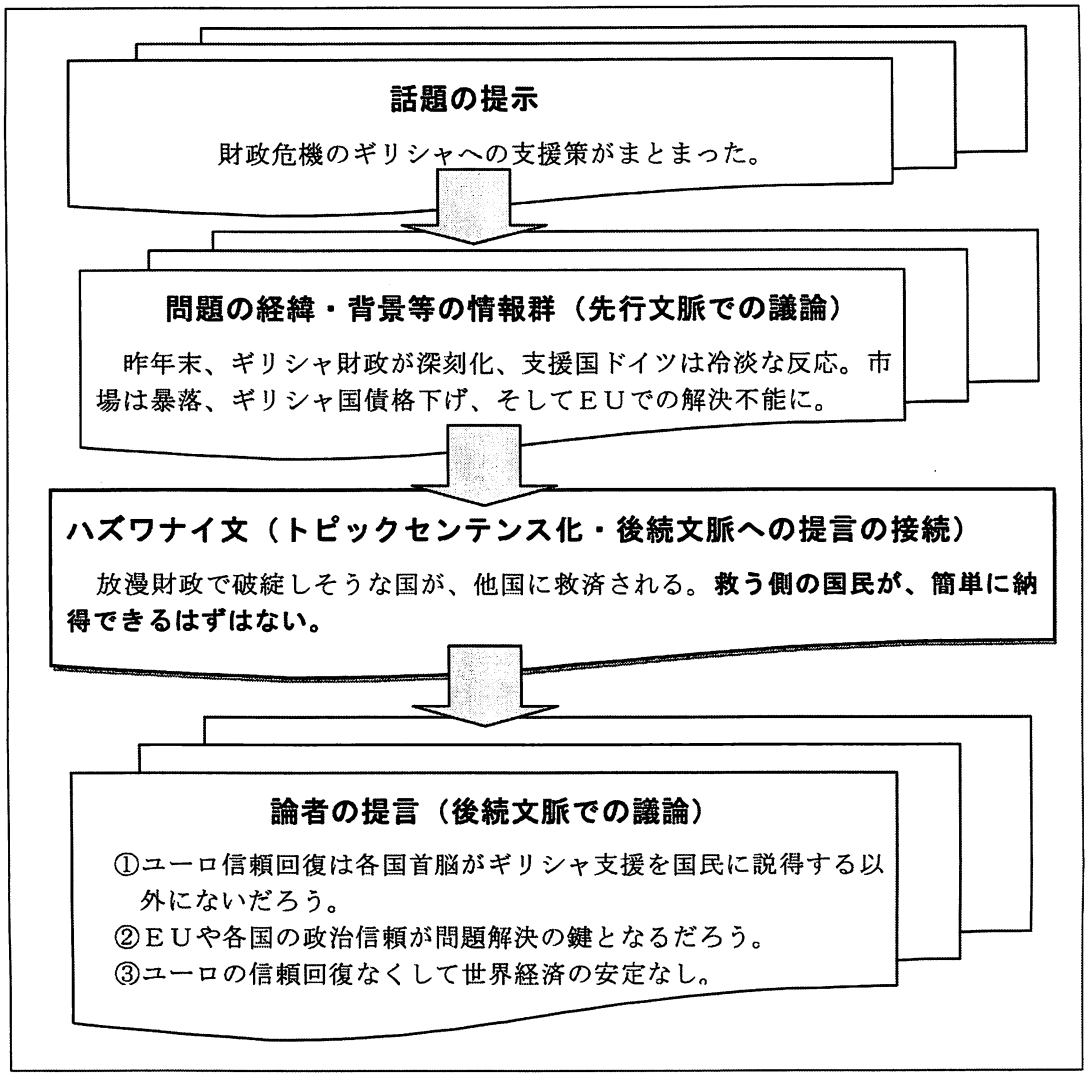


図３　用例１におけるハズワナイ文と先行文脈、後続文脈との論理関係

4.4　ハズガナイの文脈上の機能

社説総数 286：ハズガナイ文総数 165 例中、排除は 126 例、そのうち一例抜粋

用例２　「シュワブ陸上案　いきなり『県内』の不誠実」（要約文）朝日 10.3.05（波線は論者の意見相当部：筆者による）

Ⅰ①まずは沖縄県外を全力で探るはずではなかったのか。

Ⅱ②普天間基地の新移設先として、鳩山政権は名護市のキャンプ・シュワブ陸上案を軸に検討中。③官房長官と防衛相が駐日米国大使と会い、政府内の検討状況を伝達。

Ⅲ④自民政権時代に日米両政府が合意したのは、シュワブ沿岸を一部埋め立てて滑走路を造る案だ。

Ⅳ⑤陸上案も名護市移設には変わらず。⑥が、サンゴ礁を埋め立てずに済む。⑦既存基地内での建設は地元理解を得られるのでは。⑧政府はそう踏んでいるのかもしれぬ。

Ⅴ⑨だが、そもそもなぜ、日米合意以外の案を検討することになったのか、その原点を政権は忘れてはいまい。

Ⅵ⑩沖縄に在日米軍基地の７５％が集中する異常さを是正したい。⑪負担軽減を求める県民の切実な訴えに応えたい。⑫そんな決意ではなかったのか。

Ⅶ⑬１月の名護市長選で移設反対派が当選。⑭沖縄県議会は先月、県内移設に反対する意見書を全会一致で可決。

Ⅷ⑮一方、北朝鮮の脅威や軍事大国化する中国を考えれば、即、海兵隊すべてをグアムに移すわけにもいくまい。

Ⅸ⑯政府が目指すべきは県外候補地を最後まで追求することだ。⑰が、検討の軸の案が県内移設では誠実さを欠く。⑱現行案以外ならどこでもいいという話は通らない。

Ⅹ⑲**もちろん、騒音や事件・事故の危険性を考えれば、米軍基地を受け入れる自治体が簡単に見つかるはずがない。**⑳これまでの候補施設地元では、首長や議会による反対表明が相次ぐ。㉑が、そうした自治体の説得に政府が粘り強く動いた様子は伺えない。

Ⅺ㉒さらに、今なお「現行案が最善」との立場をとる米政府をシュワブ陸上案なら動かせるのか。

Ⅻ㉓名護市長は現行案のみならず、陸上案にも反対を明言。㉔社民党も反対だ。㉕鳩山政権が国内を説得し、実現を目指す案でなければ、米政府も対応に困るのではないか。

ⅩⅢ㉖鳩山首相は５月末までに移設先の結論提示を内外に公約。㉗残された時間は長くはない。

ⅩⅣ㉘本土分散に努めるにせよ、最終的に沖縄県に負担を継続する決着もありうるだろう。㉙が、平野官房長官が名護市長選の結果を「斟酌」せずと表明するなど、政府はこの間、沖縄の民意を逆なでする言動を繰り返した。

ＸＶ㉚まして最初から「県内」では、県民ばかりか国民の理解も得られない。

	段落と文の番号	論理構成の要素	内容の要旨
序	段落Ⅰ①	問題提起	沖縄県外移設案を全力で探るはずではなかったのか。
論	段落Ⅱ②③	事実	鳩山政権はシュワブ案軸に検討中。米国大使に状況伝達。
↓	段落Ⅲ④	事実	前政権時代の両政府合意は一部埋め立て滑走路造成案だ。
本	段落Ⅳ⑤⑥⑦⑧	分析／見解	既存基地内での建設は地元理解を得やすいと政府は踏んでいるのではないか。
論			
1	段落Ⅴ⑨	疑念／見解	両国合意案以外の模索の原点を政府は忘れてはいまい。
↓	段落Ⅵ⑩⑪⑫	批判	沖縄県民の負担削減のためという決意ではなかったのか。
	段落Ⅶ⑬⑭	事実	移設反対派市長の当選により、県議会は県内移設反対意見書を全会一致で可決。
	段落Ⅷ⑮	見解	軍事防衛を考えれば、全海兵隊グアム移転は無理だろう。
	段落Ⅸ⑯⑰⑱	提言	政府は県外候補地を追求すべき。現行案は誠実さを欠く。
↓		批判	現行案以外ならどこでもいいという話は通らない。
本	段落Ⅹ⑲⑳㉑	提言の帰結	**無論、米軍基地受け入れ先が簡単に見つかるはずがない。**
論			が、反対表明候補地に政府が粘り強く説得した様伺えず。
2	段落Ⅺ㉒	疑念	さらに、米政府を現行案で動かせるのか。
↓	段落Ⅻ㉓㉔㉕	見解	政権が国内を説得する案でなければ、米国も困るのでは。
	段落ⅩⅢ㉖㉗	事実	政権は５月末までの結論提示を公約。時間はない。
↓	段落ⅩⅣ㉘㉙	見解／事実	沖縄に負担継続の決着も有り得る。が、県民逆なでする言動政府内で相次ぐ。
結論	段落ＸＶ㉚	まとめ	初めから県内では、県民そして国民の理解も得られない。

表２　用例２の論理構成

用例２は先行文脈において既に問題提起（普天間基地県外移設案が県内に逆戻りし政権迷走）され、論者の意見が軸となって論理展開されている。そして、ハズガナイ文で話題上の相手の論理的まやかし（米軍基地受け入れの自治体が見つかる可能性の示唆）を完全に排除、後続文脈で再び問題提起に対する論者の意見、提言を軸に議論が発展する構造である。

形式名詞ハズに代入可能な名詞は「見込み」、「可能性」等が考えられる。ハズガナイが否定するコト（ハズに収束される「**米軍基地を受け入れる自治体が簡単に見つかる**」の部分）は先行文脈から喚起され、論者が想定したコト（文脈から読者が推論可能なコト）である。（但し、ハズガナイ文の用例すべてが読者の推論可能なコトではない。）

論者はハズに集約されたコトを否定することによって、米軍基地受け入れ自治体が

簡単に見つかる可能性を完全に排除し、ハズガナイ文で先行文脈の議論を一旦収束(先行文脈の提言の帰結）して読者に提示している。

ハズガナイ文はハズワナイ文と比べて主観的、感情的な表現である。この主観性は論者の意見を軸とした先行文脈の主観性と関連がある。この主観性がハズガナイ文において格助詞「ガ」と結びつくのである。つまり、用例２では「ガ」の排他を表す機能（ハズに包括された部分よりも述語のナイの伝達を重視）と非主題（「**米軍基地を受け入れる自治体が簡単に見つかるはず**」は主題にならない）を表す機能が先行文脈の論理の流れから、論者に「ガ」を無意識に選択させていると考える。

ここにハズガナイの文脈上の機能を次のように定める。

ハズガナイは反道義的・可能性有と想定したコトの完全否定（**主観的排除**）によって、論者の論理正当性を訴える働きを有する。

ハズに収束される「⑲**もちろん、騒音や事件・事故の危険性を考えれば、米軍基地を受け入れる自治体が簡単に見つかるはずがない**」の部分に肯定形のハズダを用いた類似表現の「米軍基地を受け入れる自治体は簡単に見つからないはずだ」を置き換えてみると、4.3の議論と同様、前後の文脈の流れに沿わない違和感が生じる。これは両者の「ハ」と「ガ」の機能の相違点からもたらされる。

肯定形の「**米軍基地を受け入れる自治体は簡単に見つからないはずだ**」に換言すると、論者の論調が基地移設案は沖縄以外にあり得ないといった流れに展開すると受け止められかねない。先行文脈の論者の提言（⑯政府が目指すべきは県外候補地を最後まで追求することだ。）からの流れに論理的なずれが生じてしまう。

一方、ハズガナイ文（「⑲（略）**米軍基地を受け入れる自治体が簡単に見つかるはずがない**」）は、現実的に基地受け入れの自治体が見つかる可能性はなしという現実性の排除の認識が前提となっている。故に後続文脈の批判的な見解へと論理的に接続するのである。

両者の非難の対象がずれるのは、係助詞「ハ」による主題化と各助詞「ガ」の排除の原理によるものである。肯定形「**米軍基地を受け入れる自治体は簡単に見つからないはずだ**」の主題は「**米軍基地を受け入れる自治体**」である。この部分を主題化すると、先行文脈の議論の流れ（⑯政府が目指すべきは県外候補地を最後まで追求することだ。）と論理的な整合性に欠く展開になってしまう。

対するハズガナイ文で訴えたいことは、ハズに収束される「**米軍基地を受け入れる自治体が簡単に見つかる**」可能性の排除にほかならない。故に「**米軍基地を受け入れる自治体**」を主題化する必然性はなく、ハズに収束されるコトを排除の原理の格助詞「ガ」によって結びつけ、ナイで全面否定するのである。

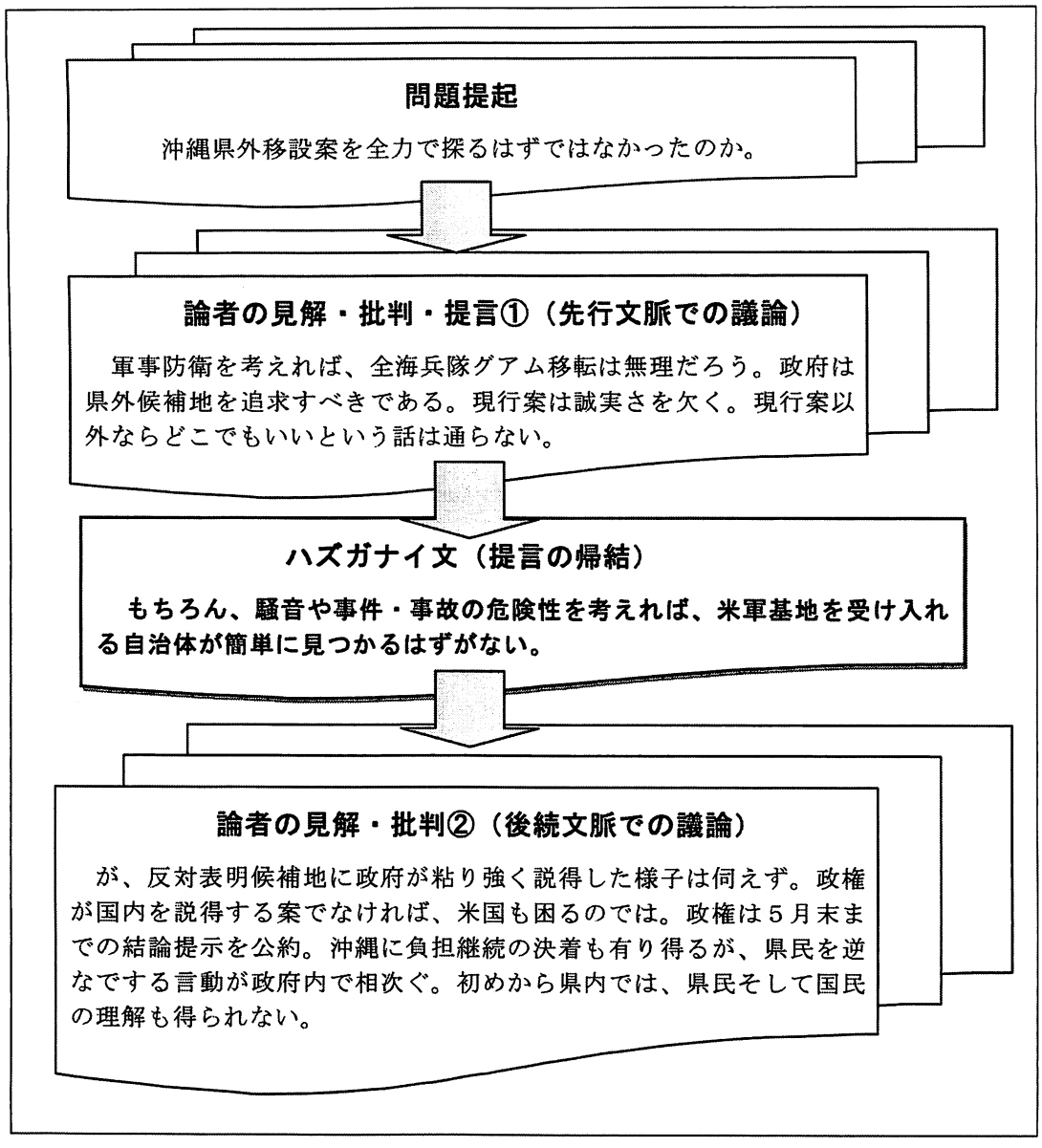


図４　用例２におけるハズガナイ文と先行文脈、後続文脈との論理関係

4.5 ハズに代入可能な名詞群

表3は社説の用例群286例を対象としたハズに代入可能な名詞群の一覧である。反道義的と仮定したコトには、「**道理、理屈、筋、理、論理、根拠、論拠、道義**」等、ハズの意味の核[6]に当たる論理に関する名詞が代入可能性の高い第一群として挙げられる。一方、可能性大と仮定したコトには、「**可能性、見込み**」が代入可能性の高い第一群として挙げられる。

用例によっては、（　）内に示した名詞も代入可能である。両者に共通する代入可能名詞は「理由、わけ」である。これらの名詞が代入可能な用例はワケワナイ文、ワケガナイ文との換言が可能な傾向が見られる。

	ハズに代入可能な名詞群 （丸数字は文脈上、代入に的確な度合いの序列を示す）
反道義的と仮定したコト	① **道理、理屈、筋、理、論理、根拠、論拠、道義** ② 理由、わけ ③ （術）、（算段） ④ （現実性）、（必然性） ⑤ （可能性）、（見込み）
可能性大と仮定したコト	① **可能性、見込み** ② 理由、わけ ③ （現実性）、（必然性） ④ （術）、（算段） ⑤ （道理）、（理屈）、（筋）、（理）、（論理）、（根拠）、（論拠）、（道義）

表3　ハズに代入可能な名詞群一覧

4.6 主機能の例外の用例について

ハズワナイ文、ハズガナイ文の典型として、用例1（4.3）、用例2（4.4）を挙げた。ここでは両者の主機能には集計しなかった例外の用例[7]について記す。

---

[6]『日本国語大辞典』第二版（2000）の記述によると、「はず」は、①弓の両端。弓の弦を受けるところ。木弓の材質から上方を末弭（うらはず）、下方を本弭（もとはず）という。弓弭（ゆはず）。②矢の上端で、弓の弦をかける部分。矢筈（やはず）。③（と弦とはよく合うところから）物事が当然そうなること。道理。理屈。筋道。転じて、予定・てはず・約束などの意にもいう、といった意味を有する。
これらの意味から、ハズダは話し手が何らかの根拠に基づいた論理構築の際に、その根拠と後続文脈へと展開する論理が話し手の中で合致し、確信に至る思考過程を経て用いられるものと考える。話し手の思考における根拠と後続文脈への論理が揺るぎなきものとして弓矢の「はず」のように強固に結びつき、確信へと至る点がハズダの核と言える。

[7] 社説総数286例中、ハズワナイ文は121例、その内、判断は73例、例外は48例だった。一方、ハズガナイ文においては、社説総数286例中、165例、その内、排除は126例、例外は39例だった。

用例３（例外１）「『普天間』移設　協定だけでは動かない」（抜粋）朝日 09.4.17

（米軍基地グアム移転により）実際にどれだけの（米軍基地の）兵員が減るのか、麻生首相の答弁は「**わかるはずがない**」だった。これでは住民負担が現状よりどの程度軽減されるか「**わかるはずがない**」ということだ。

トピック上の人物が用いているハズガナイ文の発言が、引用されている例である。用例３では引用を受けて再び同じ表現のハズガナイ文を用いている。このような引用のハズワナイ文、ハズガナイ文は例外として集計からは除外した（ハズワナイの 48 例外中１例、ハズガナイの 39 例外中３例）。

用例４（例外２）「６者協議　オバマ政権にどうつなぐ」（抜粋）朝日 08.12.9

Ⅰ　５カ月ぶりの６者協議が北京で再開。ブッシュ政権下では強硬路線により北朝鮮の核実験阻止もできず。米国が対話路線へと変更したのは昨年初め。核兵器開発の主施設無能力化の合意引き出し、北朝鮮の核計画申告内容の検証、これらを協議で詰めねばならぬ。

Ⅱ　施設での試料採取検証方法の文書明記について、確実な保証を取らねばなるまい。さらに、未申告の核施設の調査や、ウラン濃縮と核技術拡散の疑惑解明、そして核兵器の廃棄、これらはオバマ政権下で取り組む重い課題だ。

Ⅲ　過去、クリントン民主党政権で米朝関係が好転したこともあり、北朝鮮は「オバマくみしやすし」と高をくくっているかもしれぬ。

Ⅳ　だがそうはなるまい。クリントン政権時の米朝枠組み合意は、北朝鮮の新たな核疑惑で崩壊した。**オバマ次期政権の外交チームが、その苦い経験を忘れるはずはない。**

ハズワナイ文、ハズガナイ文の典型的な論理構成は、［問題提起→先行文脈の議論→ハズワナイ（ハズガナイ）→後続文脈の議論］といった展開に見られるように、ハズワナイ文、ハズガナイ文の前後で議論が行われるサンドイッチ構造が特徴である。

用例４は社説の最終センテンスⅣで論者の見解をまとめる構成となっている。事実に基づいた情報をハズワナイ文に収束する点は典型的なハズワナイ文の特徴と変わりはない。しかし、構成がサンドイッチ構造ではない用例は本研究では例外として扱った（ハズワナイの 48 例外中 34 例、ハズガナイの 39 例外中 28 例）。

用例５（例外３）「イラク空輸実績　防衛にも透明性をもっと」（抜粋）朝日 09.10.7

Ⅰ　イラクでの航空自衛隊の空輸支援活動について、防衛省が詳細実績データを発表。空自は当初、イラク南部での陸自支援が中心だったが、撤収後は飛行範囲を拡大、国連や多国籍軍部隊の輸送を支援。

Ⅱ　開示されたデータは、週単位の活動内容を詳細にまとめたもの。
自民政府は、人道復興支援のための輸送を強調。が、実態は米軍の戦争協力ではないのか。野党はそう追及したが、詳細は「安全に支障がある」として公表を拒否。
Ⅲ　今回の開示資料から活動を検証する必要があろう。
Ⅳ　空自のイラク派遣については、名古屋高裁が「他国による武力行使と一体化し、憲法９条などに違反する」という判断を提示。
Ⅴ　現地の部隊の安全を考えるのは当然だ。**だが、これを口実にして自衛隊の運用、とりわけ外国での活動実態を国民の目から隠していいはずがない。**

ハズガナイ文の典型的な議論展開は［問題提起→先行文脈での（論者の批判的見解を軸とした）議論→ハズガナイ文→後続文脈での議論］である。しかし、用例５においては典型的なハズワナイ文と同様、先行文脈では事実を軸とした情報群の記述が中心となっている。

ハズガナイ文で先行文脈をトピックセンテンス化し、後続文脈の提言へと接続する展開をなす。用例５はハズワナイと換言しても大きな違和感はない（ハズガナイの方が感情的な印象を与える）。また、ワケガナイに換言することも可能である[8]。このように提言の帰結ではない用例は、本研究では例外として扱った。論理展開のパターンが典型的なものから外れる理由は、ワケガナイとの換言が可能であることによるものと考える。両者の相違を明確に分析するにはワケワナイ文、ワケガナイ文との比較分析が必須である。

また、ハズワナイ文において議論の展開がハズガナイと同様（[問題提起→先行文脈での（論者の批判的見解を軸とした）議論→ハズガナイ文→後続文脈での議論]）のものも、例外とした（ハズワナイの48例外中28例、ハズガナイの39例外中14例）。理由は前述の通りである。二重否定のナイハズワナイ、ナイハズガナイについても、本研究では分析対象から除外した（ハズワナイの48例外中7例、ハズガナイの39例外中5例）。

以上、主として論理構成が異なる用例を典型的な型の用例群からは除外して考えた[9]。しかし、いずれの例外もハズの有する核の意味からは大きく逸脱したものは見られなかった。

---

[8] ワケガナイは先行文脈の情報を収束し、論者がそこで強制的に議論を打ち切ってしまうニュアンスを帯びる。故に社説のような議論文では用例がきわめて少なく、会話で用いられる傾向が強い。大水（2010b：77）は、社説（議論文）のワケダが持つモダリティは、複線型情報群を形式名詞が持つ意味に集約（単線型情報化）、あるいは相対化する特徴がある、と分析した。ハズは論理によって相手に強く訴える点が特徴的であるのに対し、ワケは先行文脈の情報をまとめる点に軸が置かれている。

[9] ハズワナイ、ハズガナイの例外の集計数が各例外総数より上になる理由は、用例によっては例外の種類が重複するものがあるためである。

5. 考察：効果の仮説と検証

5.1　ハズワナイ、ハズガナイの効果の仮説

社説におけるハズワナイ、ハズガナイの効果について、微視的な視点から次の仮説を導き出した。

ハズワナイは**客観的判断**によって論者の論理正当性を訴え、**同質化**をめざして**トピックセンテンス化**する。一方、**ハズガナイ**は道義性・可能性の**主観的排除**によって論者の論理正当性を訴え、**同質化**をめざして**先行文脈を収束（提言の帰結）**する。

5.2　同質化――肯定形のハズダとの類似性

肯定形のハズダ（社説文のハズダ）との類似性は**同質化**である。

大水（2010a）は論理的な文で用いられるハズダは、議論の相手や話題上の人物に対し、**同質化**（議論文において対立意見を持つ相手、および読者に論理的な正当性を訴えた上で、相手を論者の持論に引き込み、論者と同様の意見に転向させる働き）によって相手に論理的に訴え、結果として議論における論者の優位性が実現すると考察した。この結果は否定形のハズワナイとハズガナイにも当てはまる。

5.3　ハズワナイとハズガナイの同質化効果

4.3 の用例１においては、ギリシャの財政支援策の課題は支援国の理解にあるという先行文脈を、根拠を示しながらハズワナイ文（「救う側の国民が、簡単に納得できるはずはない」）によって客観的断定を下している。他の類似表現（「簡単に納得できない」、「簡単に納得できないだろう」、「簡単にできないに違いない」等々）との違いは、ハズワナイ文は相手（読者）に対して論理的な正当性を訴える働きがある点である。ハズワナイ文には対立意見を有する話題上の相手よりも読者に訴える内容の文が多い。これはある話題について客観的な情報伝達を軸とした議論構成によるものと考える。

ハズワナイ文はトピックセンテンス化し、それを受けた後続文脈で議論が発展、論者の意見へと接続する。ハズワナイ文は**同質化**によって論理の優位性の確立化を目指すのである（モデル１）。

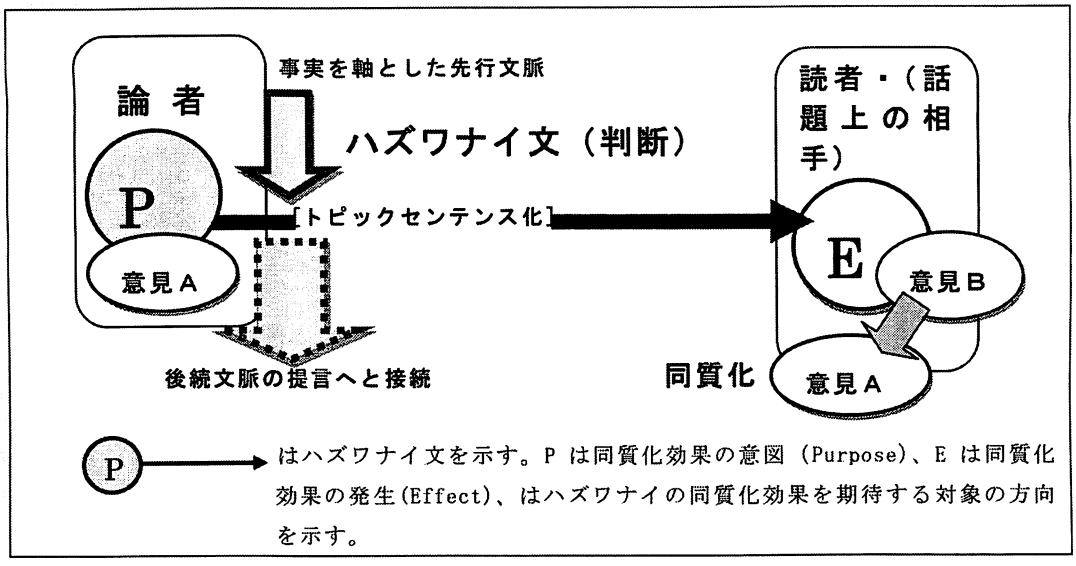
4.4 の用例２も用例１と同様、論理の正当性の訴えと同質化効果によって論理の優位性の確立を目指す点に変わりはない。但し、ハズガナイ文は先行文脈で既に問題提起がなされ、論者の意見を一旦収束（提言の帰結）する点が特徴である。また、話題上の相手と論者が対立意見を持って議論展開していく点がハズワナイ文と異なる点である。故にハズガナイ文はある話題について論者の批判的な意見を軸とした論理構成を有するのである（モデル２）。

6. 結論

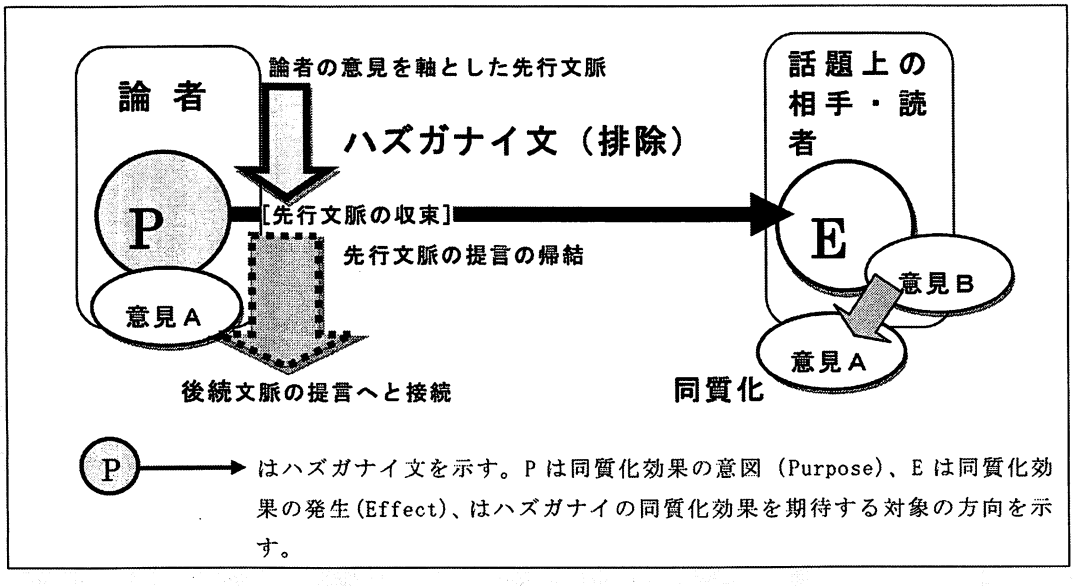
社説におけるハズダの否定形の分析と考察を行った結果、肯定形のハズダも否定形のハズワナイ、ハズガナイも議論文という微視的な視点においては**同質化**という共通目的のモダリティを持つと結論づけた。

肯定と否定は表裏一体の関係にある。それは肯定形にしても否定形にしても、論者が議論の中で他者からのプラス評価の獲得を目指し、マイナス評価を排除するという言語行動にほかならないからである。

本研究は、社会言語科学会第26回大会において口頭発表した際の論文に当日の助言を参考として論理的な裏付けを補強し、改訂したものである。主な改定部は**4.3**と**4.4**の**ハズワナイ／ハズガナイの文脈上の機能**において、類似表現との比較の視点から再考察した点、及び**4.6**の**主機能の例外の用例について**、を新たに加筆した点である。よって、論文の題目を「再考」とした。



モデル１　社説におけるハズワナイ文の同質化効果が達成した局面の構図



モデル２　社説におけるハズガナイ文の同質化効果が達成した局面の構図

引用文献

大水利之（2010a）「社説におけるハズダ文の研究―前後の文脈と機能の論理関係、同質化に関する一考察―」『杏林大学大学院国際協力研究科論文集　第７号』
大水利之（2010b）「社説におけるワケダ文の研究―その機能と効果、先行・後続文脈との論理関係―」『社会言語科学会　第25回大会発表論文集』社会言語科学会
岡部嘉幸（1998）「ハズダの用法について」 東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集　東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集編集委員会　p.39
日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典』第二版　第十巻（2001）小学館
野田尚史（1996）『新日本文法選書１「は」と「が」』くろしお出版

参考文献

太田陽子（2004）「文型指導における「文脈欠如」の問題点―日本語教科書におけるハズダの導入・練習を例に」 早稲田大学日本語研究教育センター紀要　早稲田大学日本語研究教育センター紀要　pp.53-69
大水利之（2010c）「社説におけるハズワナイ文とハズガナイ文の研究―その構造と意味、文脈における機能、効果の相違に関する一考察―」『社会言語科学会　第26回大会発表論文集』 pp.30-33
金子比呂子（2000）「『はずだ』の意味と用法―意見文における使い方―」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』26号　pp.119-286
鎌田精三郎（1992）「日本語助詞『は』と『が』―情報伝達の視点から―」 城西人文研究　第19巻第２号　pp.17-43
上代語辞典編集委員会編（1991）『時代別国語大辞典　上代編』 三省堂
寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 くろしお出版　pp.265-272
日本語記述文法研究会編（2007）「第７部　肯否」『現代日本語文法３　第５部アスペクト　第６部テンス　第７部　肯否』 くろしお出版　pp.209-301
町田健（1999）「主体を表す『は』と『が』の意味的機能について」 名古屋大学　言語学論集　第15巻　pp.197-246
室町時代語辞典編集委員会編（2001）『時代別国語大辞典　室町時代編五』 三省堂